

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 14 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520463

研究課題名(和文)日本語の複数表現の意味論と語用論

研究課題名(英文)The semantics and pragmatics of Japanese plurals

研究代表者

金子 真 (Kaneko, Makoto)

岡山大学・社会文化科学研究科・准教授

研究者番号：00362947

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では次の3点を主張した：i)日本語のタチ・ラは英語の複数形と異なり、累加複数(ex.「学生タチ」=students)だけでなく、結合複数(ex.「学生タチ」=学生とその他)、similative plural(ex.「今日ラ」=今日ナンカ)、coordinated whole(ex.「トムとジェリータチ」：タチは2匹が事態の中で対称的位置にあることを表す)など多様な用法を持つ。ii)タチ・ラは単複の区別の中和を表し得る。iii)タチ・ラの定性、特定性は、基本用法である結合複数用法において、「主名詞の外延はその他の成員より際立ち度が高い」という語用論的制約が課されることから生じる。

研究成果の概要(英文)：This study claims that i) Japanese "plural" suffixes TATI and RA may express, differently from English plural form "-s" as in "students", not only additive plural (ex. gakusei-tati "students"), but also associative plural (ex. gakusei-tati "student and associated members"), similative plural (ex. koko-ra "hereabout") and coordinated whole (ex. TATI in Tom and Jerry-tati clarifies that the two animals play a symmetric role in the event denoted); ii) TATI and RA may convey neutralization of singular / plural distinction; iii) the definiteness or specificity usually conveyed by TATI and RA is not due syntactically to the projection of an implicit DP, but to a pragmatic constraint imposed on an appropriate use of associative plural (which is analyzed as their basic meaning), according to which the referent of the host NP attached to TATI or RA should be more salient than associated implicit members.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：複数性 累加複数 結合複数 特定性 指示詞 対称性 similative plural coordinated whole

1. 研究開始当初の背景

日本語の複数接尾辞タチ・ラについては、次のような点について議論が続いている。

(1) タチ・ラは、均質的メンバーからなる集合を表す累加複数に加え、あるメンバーとその関係者からなる集合を表す結合複数も表すが、これら2つの用法はどのような関係にあるのか？

(2) 日本語を含む類別詞言語について、Chierchia 1998 (Reference to kind across languages. *Natural Language Semantics* 6) らは「全ての名詞が、atom と同時に plurality を外延に含む非可算名詞であるため、真の複数形が存在しない」と主張しているが、この仮説は妥当か？もし正しいとすると、タチ・ラが表す複数性は、英語などの複数形が表すものと異なるのか？

(3) タチ・ラは、多くの場合定解釈や特定解釈を受けるが、こうした解釈はどのように生じるのか？

2. 研究の目的

本研究は、こうした研究状況を踏まえ、通言語的、通時的観点も加えつつ、(1) 累加複数と結合複数の関係を明らかにし、(2) タチ・ラと英語などの複数形を意味的、統語的観点から比較・対照し、(3) タチ・ラの定性、特定性の起源を明らかにすること、を目的とした。

3. 研究の方法

これらの目的を達成するため、次のような方法で研究を行った。

(1) 累加複数と結合複数の関係

先行研究のうち、Nomoto 2013 (*Number in Classifier Languages*. PhD thesis, the University of Minnesota)、Ueda & Haraguchi 2008 (*Plurality in Japanese and Chinese*. *Nanzan Linguistics Special Issue* 3.2)では、累加複数用法では定解釈、不定解釈の両方が可能だが、結合複数用法では定解釈しか許容されない、「子供タチラ」「僕ラタチ」のようにタチ

とラは連続して現れることがあるが、その場合可能な解釈の組み合わせは、<累加+結合>または<結合+結合>だけであると指摘する。そしてこれらの観察をもとに、「累加用法と結合用法は、統語論的、意味論的に区別すべきであると論じている。

これに対し本研究では、収集した実例をもとに上記の観察に反論を加え、さらに通時的観点も交え、タチ・ラは2つの用法以外の用法も持つことを示した。そしてこれらの用法をすべて同音意義的であると考えよりは、それらに関連付ける分析の方が適切ではないかと論じた。

(2) タチ・ラと英語などの複数形の比較

Nomoto (2013)において「日本語の文法数には単数(=1) / 複数(>1) / general number(1)という3つのカテゴリーがあり、タチ・ラは専ら複数表示を担う」という仮説が提案されている。これに対し、本研究ではアンケート調査と実例をもとに反論を加え、タチ・ラと英語などの複数形の意味的・統語的違いを明確化した。

(3) 定性・特定性の起源

Nomoto (2013)は、タチ・ラの定性、特定性を非顕在的な DP に帰しているが、そもそも日本語には DP が存在しないと考えられることを、指示詞の分析をもとに示した。さらに本研究では、タチ・ラが必ずしも定性、特定性を表さない場合があることを指摘し、統語的説明よりは、定性・特定性を傾向としてフレキシブルに説明できる語用論的説明の方が適切であると論じた。

4. 研究成果

(1) 累加複数と結合複数の関係について

まず上記の Nomoto (2013)、Ueda & Haraguchi (2008)の主張の反例となる次のような例を挙げた。彼らによると結合複数解釈では定解釈しか許容されないはずだが、(I)では結合複数用法と解釈される「邦人学生ラ」(文脈から指示対象は1人の日本人学生とその他13人の外国人からなるとわかる)が新聞記事の見出しに現れ、不定解釈を受ける。

(I) [新聞記事の見出し] 小型機墜落。邦人学生ラ死亡。14人全員が犠牲に。

次にタチとラが連続する例の中には、彼らが指摘する<累加+結合>、<結合+結合>という組み合わせではうまく説明できない例が存在することを指摘した。例えば(IIa)では文脈から、名詞句全体の外延に含まれるメンバーは「名足保育園の子供3名」であることがわかり、ラがそれ以外のメンバーを表す結合複数用法とは解釈できない。(IIb)では、「うちラタチ」の外延は2人だけであるため、ラに後続するタチを「うちラ」とは別のメンバーを表す結合複数用法とは分析できない。

- (II)a 宮城県南三陸町立名足保育園の子供タチラ(インターネット検索例)
b. 半年かかってやっと両想いになったうちラタチ。(インターネット検索例)

さらにタチ・ラは、(IIIa)に見られるように、ナド/ナンカの擬似的例示用法に類似した *simulative plurality* 用法(ある個体+それと共通の属性を持つが漠然と指示されただけの個体からなるグループを表す用法)も持つことを示し、(IIIb,c)に見られるようにこの用法は日本語の歴史において一貫して観察されることを示した。そして *simulative plural* 用法は、「X とその他」を表す結合複数用法からの派生用法であり、「その他」の指示対象が現実世界でなく可能世界に存在すると考えることにより、2つの用法を平行的に捉えられると論じた。

- (III)a. 米の飯ラ[=米の飯ナンカ]食うじよなこたあ無かった(『日本国語大辞典』13巻:736)
b. おれラ[=喜六兵衛一人を指示]は草履の役に又せをひ物を預つた(『雑兵物語』1683年)
c. 先ほど是よりあみ笠召てお出なされた殿タチ[=宮北源右衛門一人を指示]は・・・(近松『堀川波鼓』1706年頃)

また一見累加用法と見えるタチ・ラにも、

結合用法からの派生と分析できる例があることを示した。例えば(Va)において、数詞つきの名詞に後続するタチは、英語の 16 writer-s における複数形と同様に分析できるように思われる。しかしその省略可能性を考慮すると、むしろ(Vb)における等位接続名詞に後続するタチと平行的であり、(Va)は(Vb)で列挙されている名詞が全て「作家」である特別な場合と考えるべきであると論じた。

- (V)a. 16人の作家(タチ)
b. 16人の[作家、批評家、思想家、科学者](タチ)を相手に...

そしてこれらの観察をもとに、Nomoto (2013)のように累加用法と結合用法を統語論的、意味論的に区別するよりは、Nakanishi & Tomioka 2004 (Japanese plurals are exceptional. *Journal of East Asian Linguistics* 13)が提案するように、タチ・ラの基本は結合複数用法であり、そこから(擬似的)累加複数用法と *simulative plural* 用法が派生すると考える方が、これら3つの用法の関係を自然に説明できると論じた。

(2)タチ・ラと英語などの複数形との比較・対照について

Nomoto (2013)の主張に反し、タチ・ラは複数(>1)に加えて *general number*(1)も表すこと、すなわち以下の例において「子供タチ」や「学生たち」は *atom* も外延に含むことを、明らかにした(以下の2つのテストは Farkas & de Swart 2010. *The semantics and pragmatics of plurals. Semantic and Pragmatic* 3.と Spector 2007. *Aspects of the Pragmatics of Plural Morphology*. In Sauerland & Stateva (eds.) *Presuppositions and Implicatures in Compositional Semantics*.において提案された例を日本語に援用した。:(i) (VIa)のように「子供タチ」について問う疑問文も、単数の答えを許容する。(ii) (VIb)のような非単調領域において、「他の教員は1人の学生にも会わなかった」という含意をもつ。

- (VI)a. A: うちの子供タチがそちらにうかがっていませんか?

B: はい、1人来ています。

b. ちょうど 1 人の教員が学生たちに会った。

次に等位接続名詞や複数代名詞にタチ・ラが付加されるが、名詞句全体の指示対象の数が変わらない、(VIIa,b)のような例を詳しく分析した。さらにこうした例は、事態の中で2つの要素が対称的な位置を占めることを表す述語(essentially plural predicates)を含むという観察を得た。そしてこうしたタチ・ラは、名詞句全体の外延が、個体の寄せ集めである「総和」や個々のメンバーの個別性が失われる「グループ」ではなく、coordinated whole (= 個々のメンバーが個別性を維持しつつ、同じ事態に参加することによって相互に関係し合いながら全体をなすもの)であることを表すと論じた。

(VII)a. [トムとジェリー]タチがお互いに争うシーンが少ないので、面白さは少なめ。(インターネット検索例)

b. 半年かかってやっと両想いになったうちらたち。(=IIb)

(3) 定性・特定性の起源について

タチ・ラは非明示的な DP を伴うという Nomoto (2013) に対し、そもそも日本語では DP は投射しないと考えられると論じ、その論拠として、次の例における指示詞ソノは、意味的に定性の基本条件とされる唯一性を持たず、統語的にも名詞句の付加詞位置にあると分析できることを挙げた。

(VIII) 先生がソノ著書に目を通されていた。

次のような例で「子供たち」が特定解釈(指示対象を話者が特定できる、あるいは指示対象が一定であるような解釈)ではなく、存在解釈を受けることを指摘し、タチ・ラは英語などの定冠詞や特定性を担う表現(ex. a certain)とは異なり、いつも定性・特定性を担うわけではないことを示した。

(IX)a. 公園で子供たちが遊んでいる。

b. この公園ではいつも子供たちが遊んでいる。[√いつも>子供たち]

そしてこのような例を説明するためには、定性や特定性を非顕在的な DP に帰する、統語的説明よりも、「タチ・ラが付く名詞の指示対象が、メンバーの中で際立ち度が高い」ことに帰する、語用論的説明の方が適切であると論じた。

タチ・ラの統語構造に関して、Nomoto (2013) のようにタ・ラは NumP や DP といった機能範疇に位置すると仮定すると次の3点が説明できないと指摘した: (i) 上記(IIa,b)に見られるタチとラの共起可能性; (ii) 名詞句にタチ・ラが付く場合、指示詞は必ずしも複数表示されないこと (ex. 「その子供たち/それらの子供たち」); (iii) 上記(VIIa)に見られるようにタチ・ラが等位接続された名詞句につきえること。

そしてこのような現象を説明するために、Wiltschko 2008 (The syntax of non-inflectional plural marking. *Natural Language and Linguistic Theory*. 26.3) の提案を援用し、タチ・ラは付加詞位置に現れるという仮説を提案した。

この仮説は、一般言語学的観点から、「複数」に関わる形態・統語構造と意味の対応を考える上で興味深い。もしこの仮説が妥当だとすると、「英語のような屈折形態素の複数形は専ら累加複数を表すのに対し、日本語のタチ・ラのような付加詞位置の複数形は累加複数だけでなく、結合複数、simulative plural、sum/group/coordinated whole の区別まで表すことができる」というさらなる仮説も考えられる。これらの仮説が通言語的に妥当なものか検証することは今後の課題である。

さらに本研究を進めていく中で次のような新たな課題を見つけた。

(4) タチ・ラと英仏語の無冠詞名詞の等位接続との対照研究

「等位接続名詞、複数代名詞に付くタチ・ラは、名詞句全体が coordinated whole 指示であることを表す」という仮説は、2014 年

度の発表(「等位接続名詞+タチについての分析 coordinated whole を表すものとして」『コンテクストに基づいた日本語の話し言葉』、2014年4月4-5日、ボルドーモンテニュ大学)において提示したが、その際(Xa)のような普通名詞の等位接続にタチがつく場合の分析は不十分であった。今後こうした場合タチの意味を、タチが固有名詞の等位接続、複数代名詞に付く場合と同様に分析できるか検討する予定である。

また(VIIa,b)のタチと同様に、(Xb)のような英仏語の無冠詞名詞の等位接続も、coordinated whole を表すという仮説をたて研究を進めている。

(X)a. [先生と学生]タチが互いに自己紹介をした。

b. [Profs et étudiants] se sont présentés.

ところで、coordinated whole においては、いくつかの要素が事態の中で対称的な位置を占めると考えられるが、本研究を進める中で、i) 名詞句の対称性、述語の対称性、文の対称性、さらに ii) brothers のように複数で表される個体が相互に関係を持つ例 (reciprocal plural) について、国内外でいくらかの先行研究があり、事態の中でいくつかの要素が対称的位置にある場合について詳細な区別が提案されているという知見を得た。

こうした区別を参考にし、タチが coordinated whole を表す場合と、英仏語において無冠詞名詞の等位接続が coordinated whole を表す場合で、要素間の対称性の範囲について違いがあるか、研究を進める予定である。

(5)「モーダルな不定表現」と「複数性」の関連

また本研究を進める中で、タチ・ラは、取立て詞ナド/ナンカの擬似的例示用法(ex.「この本ナンカどうですか?」)に近い、simulative plurality を表すことを見た。逆に現代奄美方言においては、ナンカがタチと同様の累加複数の意味を表わすことも知られ

ている。このように日本語においては取立て詞ナド/ナンカと複数は密接な関係を持つ。

ところでナド/ナンカは、(XIa)に見られるような、名詞句の外延が話者が同定できない不特定のものを表すナニカ(「モーダルな不定表現」と呼ばれる)と関連すると考えられるが、通言語的観点からすると、モーダルな不定表現と複数性との関連も見られる。例えば、イタリア語では命令文などでは qualche がモーダルな不定表現として使われ、(XIa)のナニカと同様の不特定の意味を表す。しかし(XIb)では、qualche は名詞の単数形と結びつき、タチ・ラと同様の、特定複数の意味を表している。

(XI)a.本をナニカ買いなさい。(cf. 本ナンカ買った)。

b. Ho incontrato **qualche** compagno di scuola, cioè Vito, Stefano et i loro amici della IV-B.

「私は QUALCHE 学校友達(単数)、つまりヴィットやステファノと彼らの4-Bの友達に会った」

今後こうした例を参考に、一見すると「複数性」とは無関係に思える「モーダルな不定表現」との関係を考察することによって、「複数性」の分析に、新たな観点を付け加えられるのではないかと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(総件数 計6件)

Makoto Kaneko. 2013. The Semantics and Syntax of Japanese Adnominal Demonstratives. In P. Cabredo Hofherr & A. Zribi-Hertz (eds) :*Crosslinguistic Studies of Noun Phrase Structure and Reference*, Leiden: Brill, pp. 239-268. 査読有
DOI: [10.1163/9789004261440_010](https://doi.org/10.1163/9789004261440_010)

金子真、2013.「日本語の接尾辞タチ・ラの複数性と特定性について」、日本語学会第147回大会予稿集、pp.224-229、査読無

金子真、2012.「日本語とフランス語のモーダルな不定表現」、『2008年度~2012年度 科研費基盤研究(C)課題番号

20520348 「フランス語および日本語におけるモダリティの意味論的研究」(研究代表者: 渡邊淳也)による論文集』、pp.30-52. 査読無

Makoto Kaneko. 2012. Japanese demonstrative *so-no* as a modifier lacking definiteness. In A. Aguiar Guevara, A. Chemilovskaya & R. Neuen (eds) *Proceedings of Sinn und Bedeutung 2*, MIT Working Papers in Linguistics, pp.335-348. 査読無

<http://mitwpl.mit.edu/open/sub16/Kaneko.pdf>

Makoto Kaneko. 2012. Indéfinis épistémiques en français et en japonais. *Actes du CMLF 2012 -3^{ème} Congrès Mondial de Linguistique Française*, SHS Web of Conferences 1 : pp.1829-1844. 査読有

<http://dx.doi.org/10.1051/shsconf/20120100086>

Makoto Kaneko. 2011. DP external epistemic ‘determiner’ in Japanese. In O. Bonami & P. Cabredo Hofherr (eds.) *Empirical Issues in Syntax and Semantics 8*. pp.239-266、査読有

<http://www.cssp.cnrs.fr/eiss8/kaneko-eiss8.pdf>

[学会発表](総件数 計6件)

金子真「日本語の接尾辞タチ・ラの複数性と特定性について」、日本言語学会第147回大会、2013年11月23~24日、神戸市外国語大学

金子真、‘Plural markers denoting salient and eventually intensional members in Japanese’、Workshop Languages with and without articles、2013年2月28日-3月1日、CNRS/パリ第8大学

<http://www.umr7023.cnrs.fr/sites/sfl/IMG/pdf/LSALAA2013Kaneko.pdf>

金子真、「日本語とフランス語のモーダルな不定表現」、2008年度~2012年度 科研費基盤研究(C)課題番号20520348「フランス語および日本語におけるモダリティの意味論的研究」(研究代表者: 渡邊淳也)公開講演会、2012年9月21日、筑波大学

金子真、‘Indéfinis épistémiques en français et en japonais’、Congrès mondial de la linguistique française (CMLF2012)、2012年7月4-7日、リヨン第2大学

金子真、‘Japanese pre-nominal demonstrative *so-no* is not a definiteness

marker’、Workshop Languages with and without articles、2012年3月14-15日、CNRS/パリ第8大学

<http://www.umr7023.cnrs.fr/sites/sfl/IMG/pdf/Isalaa2012kaneko.pdf>

金子真、‘Japanese pre-nominal demonstratives as NP-adjoined modifiers lacking uniqueness’、Sinn und Bedeutung、2011年9月2-4日、コトレヒト大学

[その他]

所属機関 URL

<http://soran.cc.okayama-u.ac.jp/view?l=ja&u=64944e818061979974506e4da22f6611>

6. 研究組織

(1)研究代表者

金子真 (KANEKO MAKOTO)

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・准教授

研究者番号: 00362947

(2)研究分担者: なし

(3)連携研究者: なし